4・28 沖縄デー 燃え上る"内なる沖縄"

弾圧と屈辱の中、それでも……

検閲

"沖縄屈辱の日"——四月二十八日。夜半から降り出した雨は朝になっても降り続いた。沖縄人民の屈辱の、怒りの涙であるかのごとく、降りそそいでいた。

しかし、昼頃にはその雨もあがった。都内では完璧なまでに装備をほどこした機動隊の小隊が街のいたるところに見え、まさに戒厳令そのものである。

三時頃、清水谷公園には革マル派の部隊が続々とつめかけた。そのまわりには相も変らず、私服刑事の陰湿な眼が光っている。公園へ向う途中のホテルニューオータニの坂のところでは、機動隊による長い"関所"がもうけられ、そこを通るものは総て検閲。今ではそれも日常茶飯事となった。なんの法的根拠ももたぬことが、白昼公然と国家の権力のもとに行なわれる。これが民主主義を謳う日本の姿……素直にカバンを、袋を開ける者、それを拒む者。所詮、権力の前にあっては一人の力では及ぶものではなかった。媚びる者だけが、弱き者だけが、権力にとって良識ある国民なのだ。この日は旗竿までが没収された。「五尺以上の旗竿は没収しろ」「形式的に旗だけ取れ」——指令が飛ぶ。旗を取るとどういうことになるか、一本の竹竿として凶器と化す。まさに権力の手の中で凶器として作りあげられる。"五尺以上の旗竿"にしろなんの法的根拠もない。違法なことが日常的に行なわれることによって"常識"となり、当然のこととして浸透して行く。権力はそれを知りつくしているのだ……。

革マル派の集会が終わる五時頃清水谷公園は三〇〇〇人近くの参加者でふくれあがっていた。その中にはまだ童顔の高校生の姿も多い。学生服姿にヘルメットのいでたちも見える。

統一

集会を終えた革マル派の隊列は「明治公園へ」と激しいジグザグデモを路上いっぱいに繰り返しながら進んだ。赤坂見附交差点では圧倒的な機動隊のお出迎え。デモ隊は完全にサンドイッチ規制、先頭部分はコズかれ、押さえつけられ、引っぱり出され、けり上げられる。それでも隊列は崩れない。

その頃明治公園では、全国全共闘、全国反戦、六月行動委の三者の共催による統一集会が開かれていた。革マル排除を呼応する全国全共闘、全国反戦は六月行動委の「多様性の統一」「特定団体の参加排除反対」の努力にもかかわらず、"防衛隊"が公園入口を竹竿を武器にしてかため、革マル派の参加を拒んだ。これを見た六月行動委は共催団体の立場を一方的におりた。

全国全共闘・全国反戦と革マルの対立は一層激化し、表面化した。のみならず、最近は、全国全共闘の中でも、大学などにおける主導権争いから対立が激化してきている。こうした"セクト主義"を如何に乗り越えるか、七〇年代闘争を担おうとしている新左翼は鋭く追及しなければならないだろう。

新左翼は死なず
「セクト主義」如何に乗り越すか
権力との笑えない"鬼ごっこ"

中核、プロ学同、反帝学評の物々しい"やりの壁"の中では、その他のセクト、ノンセクト、市民団体が外の喧騒をよそにおもいおもいの集会を開いていた。セクト主義の対立の中で、ここ一年ノンセクトはいろいろと問題はありながらもセクトに包みこまれることなく、"ノンセクト"としてガンとして存在し続けた。この日もノンセクトの隊列は少なくなかった。それに比べて市民団体の姿が少なかったのは、このところ、反軍闘争、入管法闘争などを中心とした地域闘争に重点を置いてきているからだろうか。

それにしても、反戦青年委員会の抬頭が目立った。会社側と既成組合の"反戦パージ"の中で、自らの生活を背負いながらの悪状況にもかかわらず、衰えるところなく、確実に成長してきた。動員力においても今では学生をしのぐほどの勢いである。しかしながら、この日、職場においての闘争はまったくと言ってよいほど組まれなかった。学園闘争が街頭闘争へ出て行ったように、現在、反戦青年委にとっても街頭闘争が優先されている。というより街頭闘争に出ざるを得ない。しかし職場、生産点における闘争に深化させていくことも同時に必要であろう。

デモ

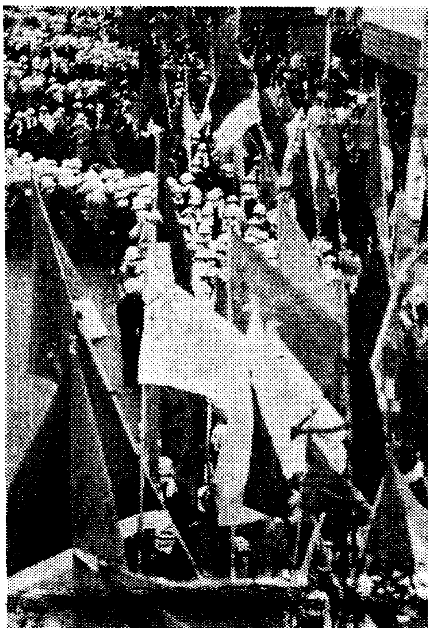
デモ隊は六時半頃、それぞれの隊列をつくり、日比谷公園を目指して出発した。はじめのうちは機動隊の規制はそれほどでもなく、激しいジグザグデモを繰り広げたが、青山通りからは相も変わらぬ厳しい規制。しかし、デモ隊も負けじと、機動隊のスキを見ては反対車線にまで及ぶジグザグデモを繰り返す。ジグザグデモを行なえば、私服と機動隊の"オミゴト"としか言いようのない一体化したデモ指揮者の逮捕。"鬼ごっこ"が続く。だがこれは"鬼"になる権利が権力の側にしかない、笑えない鬼ごっこなのだ。

サンドイッチの隊列は長い。挑発。屈辱。あの体躯に完全装備をした強大なカブトムシの前には、いかなる屈辱も耐えるしかない。まさに内なる"沖縄"——。

権力に飼いならされた機動隊は彼らの憎しみを、無意識な欲求不満を"法"の名のもとに"正義"の名のもとにデモ隊にぶつける。弱き踊らされる"悲しき玩具"だ。

平穏なうちに終わるかと思えたデモだったが、八時半頃、赤坂見付交差点で突然、反帝学評、反戦青年委の隊列が踵を返して首相官邸に向かおうとした。しかし、交差点は警察にとっても最も警戒するところ。攻撃に転じようとしたデモ隊は、突撃する機動隊に簡単に蹴散らされてしまった。それでもひかず、今度はML派の旗竿を持った部隊が恐れずに突進した。

激突の後には、身動きもできずに、苦しさと痛みに横たわる数人の学生、反戦労働者の姿。負けるとはわかっていても突撃せずにはいられぬこのジレンマ。起爆剤たろうとしたのだろうが、デモ隊は幾重にも分断され、彼らの意志は伝わらない。後続のデモ隊は散らばった石ころと、折れた旗竿の残骸にその思いをめぐらすだけであった。



沖縄

終着点日比谷公園では"沖縄デー"をカンパニアだけに終わらせまいとするデモ隊の一部が「国会へ行こう」として機動隊と小ぜりあいになった。

しかし、武器を持たぬデモ隊はみすみす捕まるしかなかった。

デモの終るころ、また雨が静かに降り出していた。

皮膚で感じ、自らをもって感じた内なる"沖縄"をいかに日常性に転化させるのか。そして、内なる"沖縄"などというにはあまりに傲慢であることを見すえねばならないのだ。沖縄人民の屈辱をドッシリと背負いこまねば……われらとて"加害者"なのだから。

夜の更けるとともに雨の銀座界隈を通る人影も少なくなり、ネオンに照らし出されながら落ちる雨滴が心なしか淋しく感じられた。

（八重樫記者）

カット左上は厳しい検閲、名づけて「青い服の関所」
◇右下は清水谷公園から出て、激しくジグザグ行進する革マル派